

GONE
WITH
the WIND

300

ミ ッ チ ェ ル

風と共に去りぬ

★★

大久保康雄
竹内道之助

三笠書房

風と共に去りぬ

第二巻

訳者との
協定により
検印廃止

1965年11月20日 第1版刊行

¥ 380

訳者 大久保康雄
竹内道之助

刊行者 竹内富子

発行所 東京都千代田区 株式会社 三笠書房
神田神保町1の46

電話 東京 (293) 9604 振替 東京 22096

藤丁・乱丁のものはお求めの書店又は本社でお取替え致します。

© Printed in Japan 恵壽堂印刷・山晃製本



『風と共に去りぬ』初版本に眺め入っている著者と父君ユージン・M・ミッチェル氏

風と共に去りぬ

★★

第三部 (つぎ)



van

第二十二章

この日の午後ほど長く、そして暑い一日は、二度とあらうとは思われなかった。はえがまた、どうしてこうも多いのかと思われるほど多く、そしてうるさかった。スカールットが、たえずうちわを動かしていても、はえはすぐにメラニーにたかりにきた。大きな棕櫚の葉の扇を動かしているうちに、彼女は腕がいたくなってしまった。いくらあお

いでもむだだった。汗ばんだ顔から追っ払ったと思うと、もうじつとしている足のほうにたかって、メラニーは、足を弱々しく動かしながら、「すまないけど、足のほうを！」と叫ぶのであった。

スカールットは、暑熱と陽光をふせぐために、よろい戸をおろしたので、部屋はうす暗かった。針のさきほどの光線がよろい戸の小さな穴や端からさしていた。部屋は、まるでかまどの中のように暑く、スカールットの汗みどろな服は、かわくどころか、時間のたつにつれて、いつそうぐつしより濡れて、べとついてきた。プリシーも、やはり汗をかきながら、すみのほうにうずくまっていたが、ひどく臭いので、スカールットは、部屋の外へ出てしまいたかった。しかし、目を離すと、すぐに逃げてしまいそうな気がして、それもできなかった。メラニーは寝台に横になっていたが、シーツは汗でうすぐろくなり、スカールットが水をこぼしたところは、きたならしくしみになっていた。メラニーは、絶えず転転として、右を向いたり、左を向いたり、仰向けになったりして、身をもんでいた。

そして、ときどきすわろうとしてみては、また横になって、身をもみはじめる。はじめのうちは皮のむけるほどくちびるをかんて、声を出すまいと耐えていたが、スカールットは、それを見てみると、自分の神経がくちびるのように傷ついてくるので、しわがれた声で言った。「メラニー、そんなにがまんしなくてもいいのよ。出したかったら、大

きな声を出しなさいな。あたしたちよりほかに、聞いているものはいないんだから」

だんだん時がたつにつれて、メラニーは、とうとうがまんしきれなくなつたと見えて、うめいたり悲鳴をあげたりした。その悲鳴をきくたびに、スカーレットは、両手で頭をかかえ、耳をおおい、身をよじらせ、自分のほうが死んでしまいたいときえ思つた。なんの力にもなれず、こんな苦痛を見ているくらいなら、どんなことでもできる。ここにしばらくたつて、赤ん坊の生まれるのを、こんなに長く待っているくらいなら、ほかのなんだって、まだました。しかも、北軍が、いまにもファイヴ・ポイントまで押しよせてくるということを知つていながら待っているくらいなら――

奥さん連中が、お産のことを、ひそひそと話していたのを、もうすこし注意してきいておけばよかつたと、彼女は痛切に考へた。きいておきさえしたら、そしてこんな問題に、もうすこし興味を持っていさえしたら、メラニーは時間がかかるのか、かからないのか、知ることができただろう。彼女は、ピティ叔母の友だちで、二日間も苦しんだあげく、けつきよく赤ん坊を生まないうまま死んでしまった人があるという話をおぼろげに思い出した。メラニーが、この話のように、二日間も苦しんだら、どうなるだろう。メラニーは、からだがとても弱いから、この苦痛に、二日間も耐えることはできないにちがいない。はやく赤ん坊が

生まれなければ、まもなく彼女は死ぬかもしれない。だが、もしアシュレがまだ生きていたとしたら、かならず世話をしますとあれほど誓つておきながら、どの面^{おもて}さげてメラニーが死んだなどと話すことができよう。

はじめのうち、メラニーは、陣痛がひどくなると、一心にスカーレットの手を握つた。あまり力をこめるので、骨がくだけそうに痛み、一時間もたつと、スカーレットの手はひどく腹れあがつて、まげることさえできなくなつてしまつた。そこで、長いタオルを二本結びあわせて、一端を寝台の足に結びつけ、一端に結び目をつくつて、それをメラニーに握らせた。メラニーは、それを、まるで救命索のように、張つたりゆるめたりして、引きちぎらんばかりにすがりついていた。その午後いっぱい、うめき声は、奔^{はし}に落ち込んだ瀕死^{ひんし}の野獣のように、いつまでもつづいた。ときどきメラニーは、タオルをはなして、弱々しく自分の手を撫で、苦痛で大きくなつた目でスカーレットを見上げた。「なにかお話ししてちょうだい。ね、なにかお話しして――」と彼女はささやいたが、スカーレットが、なにかしやべりだすと、やがてまたメラニーは、タオルをつかんで、身をもがきはじめるのであつた。

うす暗い部屋は、暑熱と、苦痛と、うるさいはえに満たされてゐた。そして、時間のたつのが、おそろしくおそいので、スカーレットには、朝のことなど、もう思い出せないくらいであつた。このむし暑い、暗い、汗臭い部屋に、

もう一生涯とじこめられていたような気さえてきた。メラニーが声をあげるたびに、自分も大きな声でなにか叫び出したくなつては、血の出るほどくちびるを噛みしめ噛みしめ、やっと、それを押えつけて、ヒステリーを起こさずにすまずのであった。

一度、ウェードが、そつと階段を上がつて、泣きながらドアの外にきた。

「ウェード、おなががちゆいたの」スカーレットが子どものところへ行こうと立ち上がりかけると、メラニーはあわててささやいた。「行かないで、ね。わたし、あなたがいてくれないと、がまんできないのよ」

そこで、しかたなしに、スカーレットは、プリシーを階下へやり、朝のとうもろこしの粥かゆをあたたためてウェードに食べさせた。彼女自身は、こんな午後を経験したあとでは、とても食事などとれるものではないと思つた。

暖炉の上の時計がとまつていたので、時間がわからなかつたが、部屋の暑熱もいくらか下がつて、針のさきのような光線も薄らいだので、彼女はよろい戸をあけた。あけてみて驚いたことには、外はもう夕暮れにちかく、真紅しんこうの太陽が沈みかけていた。彼女はなぜか、ただれるような昼間が永久につづくものというふうにのみ考えていたのであった。

市中はどうなっているのだらうと、心配でたまらなかつた。もう、軍隊は、みんな撤退してしまつただらうか。北軍は押しよせてきたらうか。南軍は、一戦も交えずに退却

したのでらうか。やがて、もはや市中には、南軍の数は寥々りやうりやうとしてゐるのに、シャーマン麾下もとの北軍があふれ、そして彼らは給養もたりているのだと思うと、とつぜん冷たいものが背筋を走つた。シャーマン！ 悪魔という名まえだつて、これほどの恐怖を彼女にもたらしはしなかつた。だが、いまは、そんなことを考えてゐるひまはなかつた。

メラニーが、つぎつぎに、水や、頭にのせる冷やしたオルや、うちわや、顔からはえを追うことを求めていたからだ。

たそがれがせまつて、プリシーが、黒い生霊きりやうのように、ちよこまか動いてランプをつけるころになると、メラニーはいっそう弱つてきた。彼女はうわごとのように何度も何度も、アシュレの名を呼んだ。そのおそろしい單調な声をきいてゐると、スカーレットは、メラニーの口に枕をかぶせて窒息させてやりたいような、はげしい気持ちになつてきた。やがて医師がくるにはくるだらう。ただ一刻でも早くきてくれさえしたら！ 希望が、かすかにわいてきた。そこでプリシーのほうを向いて、はやくミード家へ行つて、医師か奥さんがいるかどうか見てくるようにと命じた。「もし先生がいなかったら、奥さまにでもクッキーにでもいいから、どうしたらいいか、きいておいで。そして、すぐきてくださいって」

プリシーは、なにかもぐもぐ言いながら出て行つた。スカーレットは、町をかけていく彼女の姿を見てゐると、あのろくでなしのプリシーが、こんなに早く走れるとは思え

ないほどだった。やがて、かなりたつてから、彼女はひとりで帰ってきた。

「先生は、いっぺんも帰っておいでになりません。兵隊といっしょに行っちゃったんだらうということです。スカールレット嬢さま、フィルさまが死にましただよ」

「亡くなった？」

「はい」とプリシーは、重大事件だというので、大きな顔をしながら言った。「御者のトルボットがそう言いました。フィルさまは鉄砲の弾丸にあたつて——」

「もういい、もういいよ」

「ミード奥さまには会いませんでした。奥さまは、北軍がこないうちに、フィルさまの湯灌をしたり、うめる用意をしているんだつて、クツキーが申しておりました。それからクツキーは、陣痛があんまりひどくなつたら、おまじないに、メラニーさまの寝台の下にナイフを入れるといい、そうすれば、陣痛を二つに切つてしまうからつて申しておりましただよ」

スカールレットは、このばかばかしい人助けの忠告をきくと、またプリシーをなぐりつけてやりたくなつた。しかしそのとき、メラニーが、大きく、うつろな目をひらいて、かすかな声で言った。「ねえ——北軍がきてるの？」

「いいえ」スカールレットは強く言った。「プリシーがうそをついているのよ」

「そうです。わたし、うそついたのでごぜえますだよ」

プリシーも急いで言った。

「きているのね」とメラニーは、事実を察したらしくそういうと、枕に顔をうずめてしまった。そして、枕の中から、かすかな声がもれてきた。

「かわいそうなわたしの赤ちゃん、かわいそうなわたしの赤ちゃん」それから、かなりたつて、「おお、スカールレット、あなたはここにはいけないわ。ウエードをつれて逃げなければいけないわ！」

そのことなら、すでにスカールレットも心に思っていたのである。しかし、ことばに出してそれを言われると、むしろ腹が立つてきた。せっかく隠していた自分の臆病さを、すっかり見抜かれたようで、恥ずかしかったのだ。

「つまらないことをいうもんじゃなくつてよ。あたし、ちつともこわくなんぞないわ。あたしがどうして、あなただけを残して行つたりするんですか」

「行つてくだすつたほうがいいのよ。どうせ、わたしは死ぬんですもの」そう言つて、彼女は、またうめきはじめた。

スカールレットは、暗い階段を、老婆のように手摺にすがりながら、落ちない用心に、そろそろとおりて行つた。足は、鉛のように重く、疲労と緊張のために震えていた。そして、からだじゅうべとべとになった汗が冷えてきて、さむけがしてならなかった。力なく玄關のボーチに出て、階段の一ばん上に腰をおろし、ぐつたりとボーチの柱により

かかると、ふるえる手で上着のボタンをはずし、半分ばかり胸をひらいた。暗いおだやかなやみが、あたりを包んでいた。彼女はそのやみの中を、牛のようにうつそりとみつめていた。

なにもかもすんでしまった。メラニーは死ななかった。そして、小さな男の赤ん坊が小猫のような泣き声をあげながら、いまプリシーの手で産湯を使っている。メラニーは眠っていた。あのはげしい苦痛や、助けるというよりもじやまするといったほうがいくらいな産婆の手にかかった悪夢の後なのに、どうしてあんなに眠れるのだろう。なぜ死ななかったのだろう。あんな取り扱いを受けたら、自分なら死んでしまうと、スカーレットは思った。しかし、お産がすむと、メラニーは、スカーレットが身をかがめて耳を持って行かなければききとれないくらいな低い声で、「ありがとう」とさえ言ったのだ。そして彼女は眠ってしまった。よくまあ眠れるものだ。スカーレットは、自分もウェードを生んだ後、ぐっすりと眠ったことを忘れてしまっていた。彼女は、なにもかも忘れてしまったのだ。彼女の心はうつろだった。この世界もうつろだった。このはてしない一日の前には生活というものはなかったのだ。そしてこの日の後にも、おそらくはないだろう。——ただあるのは、この重苦しく暑い夜と、彼女のしやがれた疲れた息づかいと、腋の下から腰へ、臀から膝へと、じとじと冷たく流れる汗だけであった。

彼女は自分の呼吸が、大きく平靜だと思うと、発作的にしゃくりあげてくるのを感じたが、目は涙も乾ききったかと思われるほど、からからになって熱っぽかった。そろそろと、骨をおってからだをもちあげて、重いスカートをものところまでたくし上げた。暑さと、寒さと、べとべとの気持ちとを、みんないちどきに感じていたので、夜の空氣の感触が、手足にこころよかった。ふと、こうして表のボーチに寝そべってスカートをまくり上げ、ズロースまでむきだしにしているかっこうを見たら、ピティ叔母さんは、なんというだろうと、ぼんやり考えたが、しかし、べつにそれほど気にもならなかった。彼女は、もうなにも気にしなくなった。時間が、びつたりととまったのだ。日が暮れたばかりのようでもあるし、夜半のようでもあった。だが、そんなことは、どうでもよかった。

二階で足音が聞こえたので、彼女は、(プリシーのやつめ)と思いながら、いつのまにか目をとじて、ところろとまどろんだ。どのくらいいたったのか、ふと気がついてみると、プリシーがそばにきて、うれしそうにしゃべっていた。「うまいぐあいにきましただね、スカーレット嬢さま。うちのおっ母だつて、こんなにうまくはできねえでござえますだよ」

暗やみのなかから、スカーレットは、彼女を見つめていたが、疲れているので、しかりつけることも、いままですプリシーがやらかしたヘマの数かずを並べたてることもでき

ないほどだった——プリシーときたら、産婆のことなど知りもしないくせに、自慢そうにうそをついたばかりでなく、びくびくして、不器用で、お産のさいちゅうにもまるで役に立たず、はさみをおきまちがえたり、寝台に水をこぼしたり、生まれたての赤ん坊をとり落したり、失策ばかりしていたのである。しかもいまになるとまた、自分でもりっぱにやれたと言っているのだ。

そして、ヤンキーは黒奴を解放しようとしている！なるほど、黒奴にとってヤンキーは歓迎されるはずだ。

彼女は口もきかず、柱によりかかっていた。彼女のきげんのわるいのを察して、プリシーは、ボーチのやみのなかに、そっとひっこんで行った。しばらくすると、呼吸もやっと平靜になり、気持ちもしつかりしてきた。そのとき、ふとスカーレットは、町にかすかな人声を聞いた。北のほうからたくさんの人の足音がきこえてくる。軍隊だ！彼女は、そろそろとすわりなおすと、この暗やみでは見えないはずがないと思ったが、いそいでスカーレットをおろした。どのくらいの人數が見わけはつかないが、兵士たちが影のように家の前を通りすぎようとしたとき、彼女は急に呼びかけた。

「ねえちよつと！」

列の中から、一つの影がはなれて、門のところまできた。「みなさん、行ってしまふんですか。あたしたちをすてて、行ってしまふんですか」

その影は帽子をとったらしい。すぐにやみの中から、しずかな声がきこえてきた。

「そうです、奥さん。おつしやるとおりです。わたしたちは、ここから一マイルばかり北の塹壕に最後まで残っていったんですが」

「みなさんは——軍隊は、ほんとに退却しているんですか」

「そうです、奥さん、北軍が押し寄せてきているんです」北軍がきている。彼女は、それを忘れていたのだ。急にのどを絞めあげられたように感じて、それ以上口がきけなくなってしまった。その影は、またほかの影といっしょになり、足音はやみのなかに消えていった。「北軍がくる！北軍がくる！」彼らの足音は、そう言っているようだ。そして急に高く鳴りだした彼女の心臓も、このことばを叫んでいるような気がした。北軍がくる！

「北軍がきますだね！」とプリシーが彼女のほうへにじり寄って叫んだ。「おお、スカーレット嬢さま。あいつら、わたしたちをみな殺しにしますだよ。わたしたちの胸に銃剣を刺し通すんでござえますだよ。そして——」

「なにさ、おだまり！」いまさらプリシーのふるえることばをきかなくても、考えただけでちぢみあがるにはじゅうぶんだった。恐怖が、ふたたび襲ってきた。どうしたらいいのだろう。どうしたら逃げられるだろう。どこに救いを求めたらいいだろう。知っている人たちは、みんな自分を

見すてて行つてしまつたではないか。

ふと彼女は、レット・パトラーのことを思い出した。すると、ふしぎに恐怖が去つて心がしづまつてきた。けさ、頭を切られた雛鶏のように途方にくれて迷つていたとき、どうしてあのひとのことを思い出さなかつたのだろう。彼女は、彼を憎んでいた。だが、彼は強く、男らしく、スマートで、しかも、北軍を恐れていない。いまままだ市中に在るにちがいない。もちろん、この前会つたとき、彼は許すべからざることを言つて、彼女を怒らせた。しかし、それくらいのは、この場合許してもいいのではないか。そのうえ、彼は馬と馬車を持つてゐる。ああ、どうして、いままで彼のことに思いつかなかつたのだろう。彼なら自分たちを、この恐ろしい土地から、北軍の魔の手から、どこかへ、どこへでもいい、連れて行つてくれるにちがいない。彼女は、プリシーのほうに向きなると、熱病にかかつたように、興奮して言つた。

「おまえ、パトラー船長のいるところを知つてゐるね——アトランタ・ホテルだったか」

「へえ、でも——」

「でもないことよ。すぐ、行くんだ。一生けんめい走るんだよ。そして、あたしがきてくださいと言つてゐるといふんだよ。すぐに、馬車か、できるなら病人運搬車を持つてきてください。赤ん坊のことをいふんだよ。そして、どこかへ連れて逃げてください。さ、行きなさい、

はやく！」

彼女は、すわりなおすと、プリシーを早く行けと押しやつた。

「どうしたらいいだ、スカーレット嬢さま。わたし、こんなにまあ、暗いのに、ひとりで行くのは、おつかねえでござえますだよ。もしも北軍にでもつかまつたら——」

「一生けんめい走つたら、さっきの兵隊に追いつくよ。そしたら北軍につかまりつこないじゃないか。さ、はやく！」
「わたし、こわい！ パトラー船長がホテルにいなかったら、どうしますだ」

「そしたら、どこに在るかきくんだよ。おまえには、そんな知恵もないのかい。ホテルにいなかったら、デケーター街の酒場へ行つて、探すんだよ。ベル・ワットリングの家へ行くんだ。探し出すんだよ。ばか、はやく行つて、あのひとを探し出さないと、ほんとに北軍があたしたちを捕えてしまうことが、おまえにわからないのかい」

「スカーレット嬢さま、わたし、酒場へ行つたり、変な家へ行つたりすると、おつ母に綿の木でなぐられるでござえますだよ」

スカーレットは立ち上がった。

「よし、行かなければ、あたしがぶつてやる。なにも中へはいらなくても、外から呼べばいいじゃないか。それでなくとも、あのひとが中在るかどうか、だれかにきけばいいじゃないか。さ、行つておいで」

プリシーが、まだ変な顔をしてぐずぐずしているの、スカーレットは、も一度彼女を突きとばした。プリシーは、すんでのことに玄關の階段からまっさかさまに落ちそうになった。

「さ、はやく行かないと、ミシシッピへ売りとはして、野良働きの奴隷にしようよ。そしたら、もうお母さんにもだれにも会えなくなるんだよ。さ、早くおいで！」

「まあ、どうしたらいいだ、スカーレット嬢さま——」

しかしスカーレットが、なおも強く押しやるので、彼女はしかたなしに階段をおりて行つた。やがて表門の開く音がしたので、スカーレットは叫んだ。「走って行くんだよ、はやく！」

プリシーの駆けだす足音がきこえた。足音はやわらかい土の上をしだいに遠ざかつて行つた。

第二十三章

プリシーが行つてしまうと、スカーレットはものうげに階下のホールへはいつてランプをつけた。家のなかには、まるでま昼の暑熱をそのまま壁の内部へとじこめておいたかと思われるほど、蒸すような暑さだ。だが、やがて、ものうい疲労がおさまると、急に空腹をおぼえてきた。前夜い

らい、一さじのとうもろこし粥をたべたきりだったのを思い出し、ランプをとつて台所へはいつて行つた。かまどの火は消えてしまつていたが、ここはまた息づまるほどの暑さだった。鍋の中に、かたいとうもろこしのパンが、少し残つていたのを見つけ出して、彼女は、がつがつとそれをかじりながら、まだほかに食物はないかと、そこらを見まわした。深い鍋にホミニーがいくらかはいつていたので、皿にうつしもしないで、いきなり大きな料理用のさじで口へはこんだ。塩気がないとまずくて食べられないのだが、あまり空腹だったので、塩をさがすのもどかしく、四さじつづけさまに、すくいこんだ。だが、台所の暑さがあまりにひどく、耐えられなかったので、彼女は、片手にランプを、片手にかじりかけのとうもろこしパンをもつて、そこを飛び出して、ホールへ引き返した。

二階へ行つて、メラニーのそばにすわつていなければならぬと思つた。もし容態が悪くなつても、彼女は弱りきつていて、人を呼ぶことすらできないからだ。しかし夢魔におそわれたような幾時間かをすごしたあの部屋へ、いまもどるなどとは、考えただけでも、ぞつとする。たとえメラニーが死にかかつていても、彼女は上がつて行く気がしなかった。二度と、その部屋を見たくはなかったのだ。ランプを密ぎわの燭台の上において、表のポーチへ引き返した。夜気は、じわりと熱くよんでいったが、ここは、ずっと涼しかった。かすかにもれるランプの光の輪のなか

で、階段に腰をおろして、とうもろこしのパンをかじりつづけた。

パンを食べ終わってしまふと、いくぶん氣力をとりもどしたが、氣力とともに、ふたたび恐怖が襲ってきた。町のはるかかなたから騒音がひびいてきた。しかし彼女は、それがなんの前兆なのか知らなかった。ただ騒音が盛り上がってはうすれ、うすれてはまた盛り上がってくるのが、わかるにすぎなかった。彼女は、身をのり出して、その物音を聞きさだめようと耳をそばだてた。だが、すぐに緊張のために、からだの節ぶしが痛んできた。このときの彼女は、世のなにもものにもまして、ひづめのひびきがききたかった。彼女の恐怖を笑殺するレットの、あの無頓着な自信にみたたまなざしが見たかった。レットは、きつと自分たちを、どこかへ避難させてくれるにちがいない。どこへ？　それは彼女にもわからない。行き先なんか、どこでもかまわなかった。

彼女が町のほうに耳をすましてすわっていると、木立ちの上が、かすかに明るくなつた。なんだろうと思つて見ているうちに、それはしだいに明るくなって、暗い空が、はじめはばら色に、そしてつぎには鈍い紅色になつたかと思ふと、とつぜん巨大な炎の舌が木の上に噴き上がり、高く天空まで燃え上がった。彼女は思わず立ち上がった。心臓がまたはげしく不規則な鼓動を打ちはじめた。

ヤンキーが侵入してきたのだ！　彼女は、北軍が攻め入

つてきて町を焼き払っているのだと思つた。炎は町の中心の東よりから上がっているらしく、高く高く燃え上がったかと思うと、たちまち四面を真紅にいろどつて、彼女の恐怖におびえた目の前いちめんひろがった。町の一区画が全焼しているのにちがいない。かすかに、火氣をおびた微風が起こつてきて、煙のにおいが、彼女の鼻をついた。

彼女は、二階の自分の部屋に駆け上がり、もつとよく見ようと窓をおし開いた。凄惨な空の色だった。ものすごい黒煙がもうもうとまき上がって、炎のはるか上に、巨浪のような雲がただよつていた。煙のにおいが、いっそう強くなつてきた。あの火炎は、すぐにもこのピーチトリー街に燃えひろがつてきて、この家にも燃えつくのではないだろうか。ヤンキーが間もなくここへやってくるのではないだろうか。どうしよう。どこへ逃げよう——まとまりもなく、あれこれと、いろんなことが心にうかんだ。地獄の悪鬼どもが、みんなでいっしょになつて、彼女の耳のなかで喚声をあげているようだった。頭のなかは混乱と狼狽がうずを巻き、とうとうたまらなくなつて、彼女は窓わくにしがみついて身をささえた。

(考えなくてはならない)と、くりかえしくりかえし彼女は自分に言いかけた。(考えなくてはならない)

しかし、驚きあわてた蜂雀のように、考えは、捕えようもなく心を出たりはいったりするだけで、いっこうにまとまらない。彼女が窓わくにしがみついていると、耳も聳せ